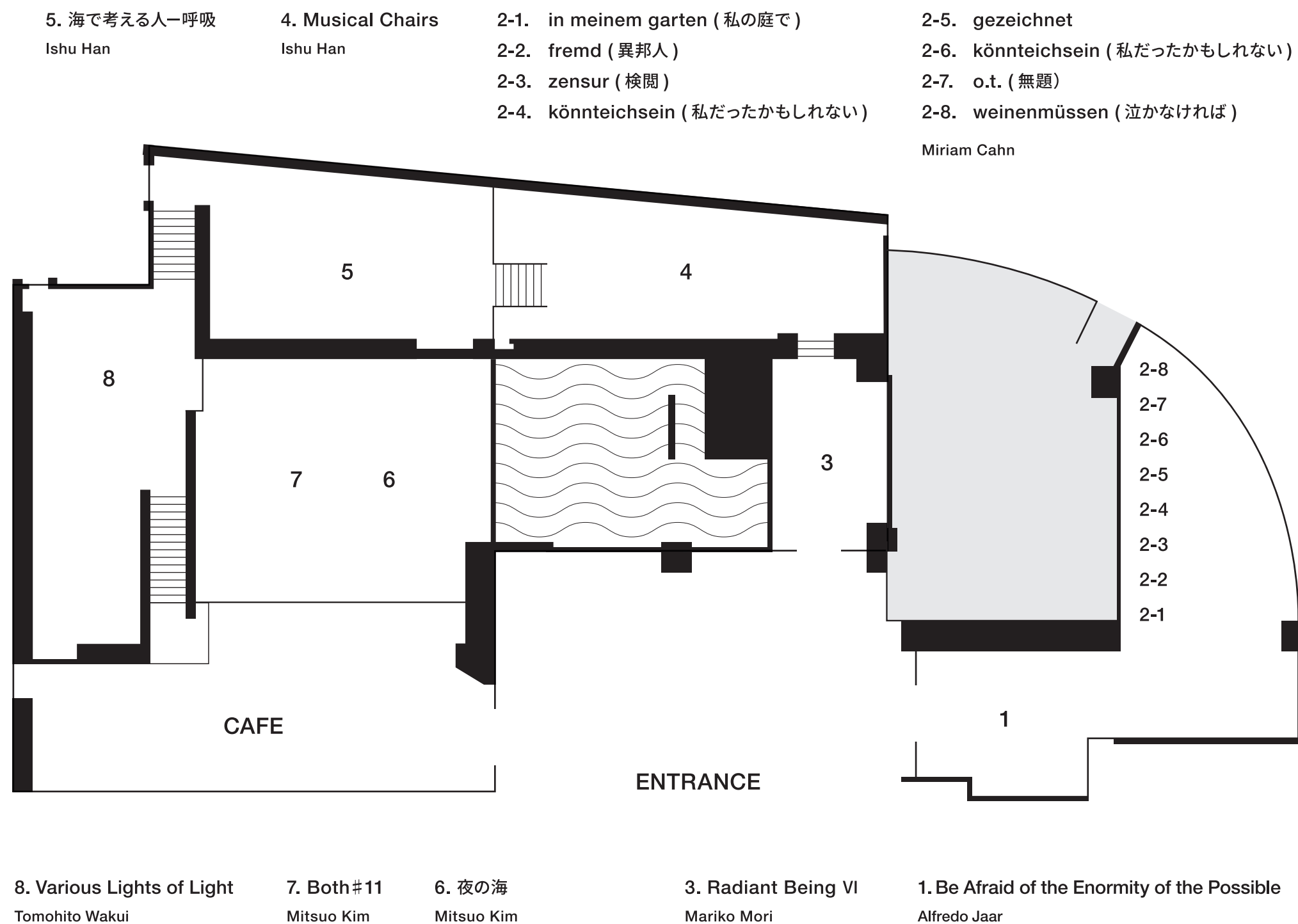




‘How to face our problems’

PwC は社会における信頼を築き、重要な課題を解決することをパーパス(存在意義)とし、世界 151 カ国に及ぶグローバルネットワークに約 364,000 人以上のスタッフを有し、プロフェッショナルサービスを提供しています。PwC コンサルティング合同会社では、PwC グローバルネットワークの経営ビジョン「The New Equation」を共有しながら、経営戦略の策定から実行まで総合的なコンサルティングサービスを提供しています。そのコンサルティングサービスは多岐にわたりますが、例えばテクノロジーによる破壊的な変革、気候変動、地政学的分断や緊迫する社会状況など、今日の世界が直面する深刻で複合的な課題を解決するためのコンサルティングサービスが挙げられます。

本展覧会では 'How to face our problems' というタイトルのもと、PwC コンサルティングが課題解決に取り組んでいるテクノロジーやエコロジー、地政学リスクなどの領域を意識させる現代アートの作品を紹介します。現代アートは五感に対するインパクトのみならず、作品を支えるコンセプトや、作品に織り込

まれたさまざまな文化的・社会的・歴史的な文脈も重要となり、作品に触れることを通して新たな視点や体験、価値観を得ることができます。VUCA と呼ばれるような急激で不確実な変化が起こる環境下において、信頼の構築と持続的な成果の創出を支援する「The New Equation」を実践するためには、既存の方法や従来の概念だけに捉われず、現代アートがもたらすような新しい感覚や思考も必要だと考えられます。

また、PwC コンサルティング自らが企画・キュレーションを行った本展覧会をきっかけとし、経営に長けたエグゼクティブから若いビジネスパーソン、これから社会に出る学生まで、さまざまな方々がそれぞれにとっての新たな方程式を描くためのヒントを得ていただければ大変うれしく思います。

PwC コンサルティング合同会社

1. Be Afraid of the Enormity of the Possible

Alfredo Jaar

アルフレド・ジャーの作品は、現代社会を反映し問題を喚起する。ネオン管の本作では、ルーマニアの思想家 エミール・シオラン(1911-1995)によるエッセイ集「A Short History of Decay(崩壊についての短い歴史)」(1949 年、Arcade Publishing)の詩の一節を引用し、世界が崩壊していく可能性とその非道さについて問いかける。本展覧会のテーマである「地政学」「テクノロジー」「エコロジー」という、私たちにとって重要な課題に向き合う上でも意識すべき言葉ではないだろうか。

Alfredo Jaar / アルフレド・ジャー
1956 年チリ・サンティアゴ生まれ。ニューヨーク在住。アーティスト、建築家、映像作家。戦争や政治腐敗、社会的不平等といった問題を意識させる映像作品やインスタレーションを発表。綿密な調査を基にしたジャーナリスティックな視点を持ち、イメージが持つ社会への影響力とその限界を問い続けている。これまでヴェネチア・ビエンナーレやドクメンタ、サンパウロ・ビエンナーレ、上海ビエンナーレなどの国際展に多数参加。作品はニューヨーク近代美術館、テートなど世界各地の美術館に収蔵されている。世界中で75 以上のパブリック・プロジェクトを実現。作品に関する単行本は 65 冊以上。日本では第 11 回ヒロシマ賞受賞。

2-1. in meinem garten (私の庭で)

2-2. fremd (異邦人)

2-3. zensur (検閲)

2-4. könnteichsein (私だったかもしれない)

2-5. gezeichnet

2-6. könnteichsein (私だったかもしれない)

2-7. o.t. (無題)

2-8. weinenmüssen (泣かなければ)

Miriam Cahn

人種やジェンダーを特定しない裸体表現や、逆に特定の社会的・地政学的状況に強く言及した表現など、カーンの描く人間は社会の価値体系の犠牲になった全ての人々とみなすこともできる。カーンは 90 年代の第二次湾岸戦争やユーゴスラビアの紛争をきっかけに、芸術を介して戦争や難民といった謂れなき暴力に対する応答を行ってきたが、本展における難民・移民のポートレートもそうした文脈に位置づけられる。私たちの世界の混沌をなぞらえるかのような有機的なフォルムで、こちらを見つめるポートレートは、私たちを不安にさせるもの、私たちが目を背けたくなるものに立ち向かうための提案とも言える。カーンは「展覧会はそれ自体が作品でありそれをパフォーマンスだと考えている」と語っているが、カーンの作品をはじめ、今回のパフォーマンス（展覧会）を契機に芸術作品が現代社会に果たす可能性を見つめることにつながれば幸甚である。

Miriam Cahn / ミリアム・カーン
1949 年スイス・バーゼル生まれ、現在ブレーグリアを拠点に活動。欧州の主要な美術館や国際芸術祭で展示を行い、多くの美術館（ニューヨーク近代美術館、テート・モダンなど多数）に作品が収蔵されている。活動初期はパフォーマンスを主な表現手段としていたが、90 年代後半から現在のスタイルである鮮やかな色彩と動的な筆使いを特徴とした油彩画を主軸にし、毎年数多くの作品を発表している。ユダヤ系のルーツを持つ自身のバックボーンから、絵画の主題には厳しい視線を持った社会問題を主に扱いながらも、同時に身の回りの山々や動植物などを等しく大切なものとして描き続け、1つの見え方に制限されない人間の本質を問いながら作品を描いている。

3. Radiant Being VI

Mariko Mori

大きな円盤状のアルミニウムに額装された「Radiant Being」は、淡いメタリックパステルなどで描かれたドローイングに CG を施した平面作品シリーズです。プラズマの粒子が大気中の原子に衝突して発光するオーロラのように、薄紫や空色、ピンクの球形が輪や放射線状に結びつき、形而上学的な示唆に富む幽玄なイメージ世界が広がっている。空間と光を操るミニマリストとして思い描いた森の構想が、繊細なマテリアルと形象との取り組みを通じて、個人の瞑想から広大な宇宙の領域への広がる過程をとどめている。心中を映し出す鏡となるこれらのドローイングは、アーティストの親密で個人的な対話の記録であると同時に、誰の脳内にも描かれる抽象的で普遍的なイメージであり、生まれる以前から私たちに引き継がれた心の原風景とも言えるだろう。

Mariko Mori / 森万里子
90 年代半ばより国際的に注目され、世界各国の国際展に参加し、美術館での個展も多数開催。主な個展に「ビュアランド」(東京都現代美術館、2002 年)、 「Wave UFO」(パブリックアートファンド、ニューヨーク、アメリカ、2003 年 / ブレゲンツ美術館、ブレゲンツ、オーストリア、2004 年)、 「Oneness」(CCBB Rio de Janeiro、リオデジャネイロ、ブラジル、2011 年)、 「Rebirth」(ロイヤルアカデミー、ロンドン、英国、2012 年)。 「Oneness」展は入場者数 50 万人を記録し、当年の展覧会入場者数で世界 1 位となった。主なグループ展に「サンパウロビエンナーレ」(2002 年)、 「第 51 回ヴェネチア・ビエンナーレアルセナーレ」(2005 年) がある。近年は屋外への作品設置プロジェクトも手掛けており、2010 年に宮古島に『サンピラー』、2016 年にリオオリンピックの公式文化プログラムの一つとして『Ring: One with Nature(リン グ・自然とひとつに)』を設置。また、サンフランシスコ近代美術館、ニューヨーク近代美術館、グッゲンハイム美術館、ポンピドゥセンター、公益財団法人福武財団など多くの公的機関に作品がコレクションされている。主な受賞歴に、1997 年第 47 回ベニスビエンナーレ優秀賞、2001 年第 8 回日本現代藝術奨励賞がある。2014 年ロンドン芸術大学より名誉フェロー授与。

4. Musical Chairs

Ishu Han

「Musical Chairs」は 2 つの映像から構成される。1 つは 5 人の人々が干潮で海から現れた小島で、岩を椅子に見立てて椅子取りゲームをするというパフォーマンス映像。もう 1 つはその小島が満潮でゆっくりと海の中に姿が消えていく映像である。国家による領土争いを想起させるような内容だが、潘らしい詩的表現に昇華されている。人間が生み出す概念や勝敗、さらにゲームの舞台そのものも、夢のように儚い。

5. 海で考える人ー呼吸

Ishu Han

潘は自らの身体を彫刻作品としてしばしば映像に登場させており、「海で考える人」ではロダンの彫刻「考える人」のポーズをしながら海中を浮遊し続けている。海には境界がなくどこにでも行けるようだが、実際にはいくつかの見えない線が引かれている。広大な自然たる青い海、そこに包まれながら孤独に考える個、そうした自然や個の在り方を無視するかのような人為的な国境と、エコロジカルと地政学的な眼差しが詩的に交錯する映像である。

Ishu Han / 潘逸舟
1987 年上海生まれ。東京都在住。映像、パフォーマンス、インスタレーション、写真などのメディアや身の回りの日用品などを用いて、共同体や個が介在する同一性と他者性について考察する作品を発表している。幼い頃に上海から青森に移住した経験を持つ自身の視点をベースに、切り取られた日常風景の中に自らの身体を介入させ、社会と個の関係の中で生じる疑問や戸惑いを、真摯に、時にユーモアを交えて表現する。国内外の美術館の展覧会（ボストン美術館、ユダヤ博物館、上海当代美術館、水戸芸術館現代美術センター、弘前れんが倉庫美術館、東京都現代美術館、東京都写真美術館、金沢 21 世紀美術館など）や芸術祭に参加。日産アートアワード 2020 グランプリ受賞。

6. 夜の海

Mitsuo Kim

背景には 1948 年の民衆蜂起・虐殺（済州島四・三事件）がある。金の母が幼い頃、泣かないように1 枚だけ渡されたビスケットをいつまでも握りしめて日本に渡航したというエピソードが反映されている。

7. Both #11

Mitsuo Kim

10 メートル超に及ぶ作品（東京初公開）。金網のイメージを版によって反復させ、炎であぶって傷付ける（融解させる）身振りは、金網の合理性（安価な分断と簡易な拡張）や型化された分断に対する抵抗にもみえる。朝鮮半島 38 度線の DMZ に象徴される分断は物理的・心理的にいつでも・どこでも生じかねないが、そうした事実を突きつけるかのように作品が立ちはだかる。

Mitsuo Kim / 金光男
1987 年大阪市生まれ。「VOCA 展 2014」奨励賞、2016 年「京都市芸術新人賞」受賞。2014 年、金沢 21 世紀美術館における注目作家の個展シリーズ「APERTO」の第 1 回目に抜擢。直近では「TERRADA ART AWARD 2023」ファイナリスト選出など、国内外で活躍している。平面作品は綿布の上にパラフィン(蠟) を薄く敷き、その上に自ら撮影した写真画像をシルクスクリーンで転写し、熱を加えてイメージを融解させる独自考案した世界初の手法で制作。蠟という不安定な素材には自身のバックグラウンドによる存在の不確かさや曖昧さが反映されている。

8. Various Lights of Light

Tomohito Wakui

本作では、生成 AI を使ったビデオインスタレーションを展開する。使用される LED パネルや液晶モニターは廃棄されたジャンクパーツであり、それらを現代のテクノロジーによってリサイクルし、新しい用途を持ったオブジェクトとして蘇らせている。AI を含めたテクノロジーの可能性やデータの根源性、私たちとデータとの関係性を問い直し、予期されない未来へと問い直しを図っている。

Tomohito Wakui / 涌井智仁
1990 年新潟生まれ。涌井は美術家、音楽家、キュレーターとして、多岐にわたる分野で活動。自らプログラミングを行い、生成 AI のような先端テクノロジーから旧式のデジタル機器まで使いこなし、主にジャンクパーツや AV 機器を用いることでテクノロジーの進化の中で捨て置かれた「有機性」を表現してきた。金沢 21 世紀美術館や現代アートのコマーシャルギャラリー (8/ ART GALLERY/ Tomio Koyama Gallery や ANOMALY) で展示を行うなど、テクノロジーを積極的に使いながらも、テクノロジーに振り回されない作品表現の在り方に評価が高まっている。